

# 迂言的受身表現「～を受ける」について

## —漢語サ変名詞の特徴を中心に—

孟 熙

キーワード：迂言的、機能動詞、本動詞、動作性名詞、漢語サ変名詞

### 1. はじめに

日本語の受身表現は一般的に動作を表す動詞語幹に助動詞の「(ラ) レル」がついた派生動詞と、動作の主体と客体を表す二つの名詞句の格形式の交替によって特徴づけられる。

- (1) a. 太郎が次郎を殴った。
- b. 次郎が太郎に殴られた。

ところが、日本語の受身表現の中には、この文法的手続きによるもののほかに、「～を受ける」、「～をあびる」のような語彙的なものもある。

- (2) a. 花子が太郎に注意を与えた。
- b. 太郎が花子に注意を受けた。
- c. 太郎が花子に注意された。
- (3) a. 民衆は政府を非難した。
- b. 首相が民衆から非難をあびた。
- c. 首相が民衆に非難された。

「～を受ける」のような表現は村木(1983)では「迂言的なうけみ表現」と呼ばれている。「受ける」だけではなく、「あびる」、「あつめる」、「まねく」、「くう」などもこの「迂言的なうけみ表現」を作る動詞に属すると村木(1983)で述べている。

本稿ではその中で最も生産性の高い「～を受ける」を中心に考察を行う。村木では動作性名詞が「～を受ける」と結びつく場合は「-される」と同様な受身表現であり、同義性も保つと述べているが、「試験を受ける」や「講義を受ける」、「オーディションを受ける」などは受身的な意味が読み取りにくく、むしろ文の主体は能動的に動作を行うように感じられる。そこで、本稿では共起する名詞の性質により、「受ける」が異なる働きをすると主張する。また、「～を受ける」はすべての名詞と共起できるわけではないが、共起できる名詞はどのような性質を持っているのかも明らかにする。

## 2. 先行研究

村木(1983)は迂言的とよぶものは、ある意味内容をより分析的な言語形式によって表現したものを指すと述べ、さらに、受身表現にも主格の名詞に対し、求心的な動きを表す動詞による受身的な語結合、すなわち「迂言的なうけみ表現」と呼ぶべきものが存在すると述べている。村木(1983)で挙げられた例文をいくつか挙げる。

- (4) (略)野党の抵抗にあいそうだ。
- (5)「今晚は一つおれにうんとお父さんにご馳走にあずからなくちゃならないね」
- (6) 彼はスーリコフ美術大教授として、尊敬を集めている。
- (7) いったん攻撃を受けると、その反撃力はものすごく勇敢なファイターに一変する。
- (8) (略)「まずまずの評価を得られるのではないか」と自信を示した。
- (9) 退学処分をくらってしまった。
- (10) (略)会場の爆笑とかさいを浴びた。
- (11)「今後、県民の誤解を招かないよう、さらに指導を強めたい」
- (12) しかも「予告先発」のプレッシャーに負けず、杉浦に本塁打を許したものの

村木(1983)ではこれらの動詞「あう」、「あずかる」、「集める」、「受ける」、「得る」、「くらう」、「浴びる」、「招く」、「許す」などは「語彙的な意味をうしなつて、文法的なはたらきをしている」機能動詞であると述べている。また、これらの文では、動作の客体が主格に立ち、主格に対して求心的な動きを表しており、さらにいずれもその対応する有標な受身形「-される」と同義性を保ち、競合関係にあり、交替できるため、迂言的な受身表現であると主張している。しかし、「競合関係」、「交替関係にあり」と述べながらも、リストアップされた名詞の中に「衝撃」、「ショック」のように「～する」の形にならない語と後述する「迷惑」のような「-される」になれず、迂言的受身表現を構成するとは考えにくい語も含まれている。また、具体的に「受ける」のような動詞はといったいどのような文においては本動詞であり、どのような文においては機能動詞として機能するのかは不明である。例えば、例(13)－(15)における「受ける」は本動詞なのか機能動詞なのか判断がつきにくい。これと連動し、文は受身表現なのか、ただの能動表現<sup>1</sup>なのかも判断しにくい。

- (13) 自動車学校を卒業してからどのくらい後に本免試験を受けに行きましたか？
- (14) 友人の奥さんにアドバイスを受けた。
- (15) 人々からさまざまな恩恵を受けて生きていくことができる。
- (16) 履歴書・資格証を8月8日までに持参し、面接を受けてください。

---

<sup>1</sup> ここでいう能動表現と受身表現は構文的なものではなく、意味的なものである。

これらの問題はすべて前に現れる名詞の性質と深くかかわると考えられるが、村木では機能動詞の前に現れる名詞をリストアップしたものの、その性質については触れていないため、より詳しく検討して記述する必要があると思われる。

### 3. 共起する名詞の種類

村木(1980)(1983)では、「～を受ける」の前に現れる計 142 の名詞を挙げた。これに加え、本稿では「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」<sup>2</sup>を利用し、224 語を採集した。重複する語を除くと、「～を受ける」の前に現れた名詞は全部で 313 語あった。

村木のリストを検討すると、漢語サ変名詞は 111 語（「サービス」のような外来語サ変も含む）、動詞連用形は 28 語（「取り調べ」など）、さらに「～する」の形にならない名詞も含まれている（「衝撃」、「打撃」、「ショック」）。村木では「動作性名詞」という用語を使用しているが、どのようなものが動作性名詞なのかは明示していない。また、BCCWJ の用例を整理すると、「損害」、「利益」や「オーディション」、「樺」などの名詞も数多く現れた<sup>3</sup>。そこで、本稿では漢語サ変名詞と区別するために、「～する」の形にならない名詞を一般名詞<sup>4</sup>と呼ぶことにする。

BCCWJ で採集した名詞及び村木のリストでは、漢語サ変名詞が最も多く、合計 207 語あった。ここで問題となるのは「衝撃」、「打撃」など「～する」の形にはならないため漢語サ変名詞ではないが、「樺」や「球」などの名詞とも異なり、何らかの動作性を感じさせる一般名詞である。BCCWJ より採集した名詞の中からこのような名詞を(17)のように示す<sup>5</sup>。

- (17) a. 衝撃、打撃、診査、損失、洗礼、浸礼、事故、特許、利益、亀裂、苦言、被害、損害、好評、医療  
b. ショック、オーディション、カウンセリング、マンドート、レッスン、ダメージ、メール、ガイダンス

(17)は漢語サ変名詞ではないが、「樺」とも異なるような一般名詞である。以下の分析では紙幅の関係で、(17)a の漢語のみを対象とする。b の外来語も a の漢語と同様な現象を見

<sup>2</sup> 国立国語研究所による。検索には少納言を用い、500 例の用例を採集した。また、なるべく広く検索できるように、すべてのサブコーパスを使用した。 [http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search\\_form](http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_form)

<sup>3</sup> コーパスより「これを受けて」や「崩壊を受けて」も現れたが、後続する「受ける」はすべて「を受けて、～する」のような形をしており、本稿で検討する機能動詞としての「受ける」が使用された表現と異なるように感じられる。そのため、このような時間的な前後関係を表す「受けて」を除外する。

<sup>4</sup> これは厳密な用語ではない。あくまでも本稿で考察する漢語サ変名詞と区別するために用いた用語である。

<sup>5</sup> 『明鏡国語辞典』によると、村木(1983)のリストの中の「衝撃」と「打撃」は名詞とされている。実際のコーパスとインターネットで調べると、「衝撃する」、「打撃する」、「事故する」などが現れたが、必ずしも信頼できる用例ではないため、本稿では『明鏡国語辞典』に従い、これらをサ変にならない一般名詞と見る。

せると考えられる。

(17)a の一般名詞は、以下のように「～する」の形になりにくいことが分かる<sup>6</sup>。

- (18)?街灯を衝撃した。
- (19)?腹部を打撃した。
- (20)?虫歯を診査する<sup>7</sup>。
- (21)?200 万を損失した。
- (22)?赤ちゃんを洗礼する。
- (23)\*信徒を浸礼する。
- (24)\*新型飛行機が事故した。
- (25)\*新しい発明の特許した。
- (26)\*1 億円利益した。
- (27)?右足の脛骨が亀裂した。
- (28)?政府に苦言する。
- (29)\*たいへん被害した。
- (30)?施設を損害した。
- (31)\*新メニューを好評した。
- (32)\*患者を医療した。

伊藤・杉岡(2002)は、日本語の名詞においては英語と同様に、名詞の動作性の高低を測ることができると主張した。伊藤・杉岡(2002)はそのテストとして終結点や動作の長さを表す「～以内」、「～まで」、「～で」というアスペクトを示す時間表現を使用した。また、Shibatani and Kageyama (1988) はコトを表す名詞の中に、「～中」、「～後」、「～直後」のようなアスペクトを表す接辞または名詞をつけられるものがあると指摘した。このようなアスペクト接辞や名詞が付加できるということは、すなわちアスペクトを示す時間表現の

場合と同様にその名詞に動作性が含有されていることを示していると考えられる。

そこで、(17)で挙げた一般名詞がいったい動作性を持つかどうかを判断するために、本稿では「～を/に～後/中」を使用する<sup>8</sup>。

- (33) バイクに乗ったまま街灯を衝撃後、重体になってしまった。

<sup>6</sup> これらの名詞は「～する」の形になるかどうかについては日本語母語話者のインフォーマント 2 名に尋ねた。

<sup>7</sup> 「診査する」は厚生労働省のホームページにある「統計情報・白書」で現れたが、専門用語として用いられており、一般的には使われないため、日本語母語話者のインフォーマントの判断では「？」となったと考えられる。<http://www.mhlw.go.jp/topics/2007/01/tp0129-1a.html>

<sup>8</sup> これらの文はすべてコーパスの用例などに基づいた作例であり、自然さは日本語母語話者の判断による。

- (34) 腹部を打撃後 10 数時間を経てから症状が顕著化した。
- (35) ホワイトニングする歯を診査後、ホームホワイトニングの使用説明もする。
- (36) 株と FX で 2000 万円を損失後、太郎の人生は大きく変わりました。
- (37) 施設設備を損害後、賠償をせずに逃げてしまった。
- (38) 被害後の緊急支援を強化しなければならない。
- (39) 教会に寄ったら牧師さんは花子を洗礼中でした。
- (40)\*代車を事故後、高額な費用を請求された。
- (41)\*新しい発明を特許後、すぐ生産を始めた。
- (42)\*1 億円を利益後、海外で子会社を設立した。
- (43)\*右足の頸骨を亀裂後、ぜんぜん動かなくなってしまった。
- (44)\*太郎は会社に苦言中です。
- (45)\*田中先生は今患者さんを医療中です。
- (46)\*このスイーツの店は女性に好評中です。

その結果、(17)に示した漢語サ変名詞ではない一般名詞の中で、動作性があるのは「衝撃」、「打撃」、「診査」、「損失」、「損害」、「被害」、「洗礼」、「浸礼」であり、動作性のない名詞は「苦言」、「好評」、「事故」、「特許」、「利益」、「亀裂」、「医療」と判断した<sup>9</sup>。

すなわち、「～を受ける」の前に漢語サ変名詞、一般名詞（「擧」、「苦言」、「ショック」のような動作性を持たない語、「衝撃」のような動作性を持つ語）、さらに動詞連用形が現れることが分かる。

## 4. 共起する漢語サ変名詞の考察

### 4.1 漢語サ変名詞の語彙的性質

前節では BCCWJ を用い、「～を受ける」の前に現れる名詞を検討したが、本稿では最も多く現れた漢語サ変名詞について詳しく考察する。

村木(1983)では動作性名詞が「～を受ける」と共起する場合、「迂言的なうけみ表現」となり、「-される」と同義性を保つと述べている。ところが、下の(47)(48)の表現を見てみよう。

<sup>9</sup> これらの名詞の語構成、すなわち二字漢語名詞における前項要素と後項要素の性格と結びつきという観点から観察しても、「～を/に～後/中」のテストと同様の結果が得られるように思われる。並木(1994)によると、形態論において、主要部は語全体の品詞を決め、さらに語の意味の中心をなす要素である。もし V-V タイプであれば、前項、後項のいずれが主要部となっても動詞的な要素であるため、語全体は動作性を持つ。「衝撃」や「打撃」などの漢語名詞は前項要素と後項要素がともに動詞的要素であり、すなわち V-V タイプであり、動作性を持つ。アスペクト接辞のテストにおいても「～を/に～後/中」と共起できた。これに対し、「利益」や「好評」などの N-N タイプ、ADJ-N タイプの漢語名詞は主要部が名詞的な要素のため、名詞全体も動作性を持たない。「～を/に～後/中」のテストでも共起できなかった。但し、「医療」が問題となる。語構成から見ると「医術、医薬で治療する、治す」という ADV-V タイプではあるが、アスペクト接辞と共起できないため、本稿では動作性を持たない一般名詞とする。

(47) 試験を受けに行くときの服装はどういったものがよいのでしょうか？

(48) 篤が言った。「辛抱して、講義を受けた。」

(47)と(48)の「～を受ける」の前に現れる名詞は典型的な動作性名詞である漢語サ変名詞にもかかわらず、受身表現よりむしろ文の主語は能動的にその動作を行おうとするように感じられ、(49)と(50)のような動作性を持たない一般名詞が「～を受ける」と結びつく文と似ている。例文(49)(50)における「受ける」は「受け取る」、「受け入れる」などの複合動詞と置き換えができるように、本動詞であり、文も受身表現ではなく、能動表現であることが分かる。

(49) 6位でたすきを受けた4区の田中が区間2位の走りで2位に浮上。

(50) 学習サークルが国の助成金を受けるためには、いくつかの条件を満たさなければならない。

このように、「～受ける」の前に「試験」や「講義」のような漢語サ変名詞が現れる際、文は受身表現ではないように感じられる。では、ほかの漢語サ変名詞の場合はどうなるだろう。そこで、本稿ではこれらの漢語サ変名詞の文を「-される」に置き換えるテストを行う。

村木(1991)では機能動詞は「実質的な意味を名詞に預けて、みずからはもっぱら文法機能を果たす動詞」と定義している。すなわち、「影響される」のように単一の動詞で表しうる意味を「影響を受ける」のように「名詞＋格助詞＋動詞」で表す。この「受ける」の意味が希薄化し、実質的な意味を持たない機能動詞として働き、実質的な意味を前に来る「影響」に預けている。「影響」は実質的な意味を表すため、「影響される」と「影響を受ける」が同義性を保つことも当然である。

(51) a. 無意識のうちに影響を受けていた。

b. 無意識のうちに影響されていた。

(52) a. 民衆から反撃を受けた。

b. 民衆に反撃された。

(53) a. 花子から注意を受けた。

b. 花子から注意された。

(54) a. 上司から期待を受けている。

b. 上司から期待されている。

(51)-(54)のように、aとbは意味が変わらず、同義性を保っていると言える。これらの

文こそ村木でいう「迂言的なうけみ表現」であろう。

(49)と(50)の「たすき」、「助成金」が「～を受ける」の前に現れる際、無論「-される」に置き換えることができない。しかし、(47)(48)の「試験」、「講義」は(51)-(54)の「影響」、「反撃」、「注意」、「期待」と同じような漢語サ変名詞であるにもかかわらず、異なる現象を見せる。

(55) a. 教習所で試験を受ける。

b. 教習所で試験される。

(56) a. 先生から講義を受けた。

b. 先生から講義された。

(55)(56)は(51)-(54)と異なり、受身形にすると、意味が変わってしまうため、(55)aと(56)aは迂言的受身表現とは考えにくい。むしろ前節で述べたように、動作性を持たない一般名詞が現れる際と同じように能動表現と見たほうが良いようである。

すなわち、村木では動作性名詞が「～を受ける」の前に現れる際、文は受身表現であり、「-される」と同義性を保つと述べているが、本稿では同じく動作性を持つ漢語サ変名詞でも、異なる漢語サ変名詞が現れると、文全体も異なる性質を見せる現象が観察できた。では、どのような漢語サ変名詞が現れると、文は「-される」と同義性を保つ受身表現なのであり、どのような漢語サ変名詞が現れると、文は動作性の備えない一般名詞が現れる際と同様な能動表現なのであろうか。これについては仮説を立てて検討する。

本稿で考察する「～を受ける」の前に現れる漢語サ変名詞はいずれも文の主語になれるため、無論名詞性を備えている。また、「～する」の形にもなれるため、動詞性も備えている。しかし、(51)-(56)の「-される」との置き換え可否の考察で明らかになったように、「試験」や「講義」などのような漢語サ変名詞と「注意」、「依頼」などのような漢語サ変名詞とは異なる性質を有し、文全体も異なる性質を見せるように思われる。ここで、本稿では以下のような仮説を立てたい。

(57) ①漢語サ変名詞は動詞的性質と名詞的性質の両方を兼ねているが、各語が持っている動詞的性質と名詞的性質の度合いがそれぞれ異なる。動詞性<sup>10</sup>がより強いものと名詞性のより強いものがある。

②名詞的性質のより強いものは文の中では無論名詞性がより読み取りやすく、「～を受ける」と結びつく際、「受ける」の目的語となる。この際の「受ける」は本動詞として働き、文は能動表現である。それに対し、動詞性がより強いものが「～を受ける」と結びつく際、「受ける」は機能動詞であり、前の名詞

<sup>10</sup> ここでいう動詞性とは動詞的性質のことであり、名詞性と対立する語である。漢語サ変名詞が持っている動作性とは異なる用語として使っている。

が実質的意味を表す機能を担っている。文は「-される」と同義性を保ち、いわゆる村木で言われている迂言的受身表現である。

(57)の仮説を検証するために、直接漢語サ変名詞が持つ動詞性と名詞性の度合いを測るような方法をとるべきであるが、本稿では「受ける」が本動詞として機能しているか機能動詞として機能しているかをテストに用いて判断する。「受ける」が本動詞として機能する際、前に現れる漢語サ変名詞はその対象であるため、動作性を持たない一般名詞が現れる際と同じように、名詞性がより高い。それに対し、「受ける」が機能動詞として働く際は、漢語サ変名詞が実質的な意味を持ち、動詞性がより高いと考えられる。本稿では、このような間接的な方法をとる。

「受ける」が本動詞なのか機能動詞なのかを判断するために、本稿では分裂文の成立可否をテストに用いる。もし「受ける」が機能動詞として働くなら、語彙的な意味を失い、実質的な意味を前に現れる名詞に預けており、前の名詞とは分離できない一つの単位になるため、分裂文にはなれないはずである。これに対し、「受ける」が本動詞なら、分裂文が成立するはずである。

- (58) a. 太郎が政府から特別給付金を受けている/受け取っている。  
b. 太郎が政府から受けている/受け取っているのは特別給付金だ。  
(59) a. 太郎が花子から襷を受けた/受け取った。  
b. 太郎が花子から受けた/受け取ったのは襷だった。

例(58)、(59)は動作性を持たない一般名詞の文であり、この場合の「受ける」はもちろん本動詞であり、aをbの分裂文にしても自然な文である。

- (60) a. お父さんから影響を受けた。  
b.\*お父さんから受けたのは影響だった。  
(61) a. 上司から期待を受ける。  
b.?上司から受けるのは期待だ。  
(62) a. 敵軍から反撃を受けた。  
b.\*敵軍から受けたのは反撃だった。  
(63) a. 先生から示唆を受けた。  
b.\*先生から受けたのは示唆だった。  
(64) a. 母から干渉を受けた。  
b.?母から受けたのは干渉だった。

これらの文ではaをbの分裂文にすると、文が不自然になってしまう。すなわち、これ

らの文における「受ける」と漢語サ変名詞は分離しにくく、ひとまとまりに用いられている。これは、「受ける」が本動詞ではなく、機能動詞として働いていることを意味している。これらの文においては、「漢語サ変名詞+を受ける」は「漢語サ変名詞-サレル」と同様な受身表現であり、aは迂言的受身表現である。

それに対し、以下の漢語サ変名詞が現れる際、分裂文にしても自然さが変化しない。

- (65) a. 今日の午後、太郎が面接を受ける。  
b. 今日の午後、太郎が受けるのは面接です。
- (66) a. みんなの頑張っている姿から感銘を受けた。  
b. みんなの頑張っている姿から受けたのは感銘だった。
- (67) a. 昨日朝から夜まで講義を受けた。  
b. 昨日朝から夜まで受けたのは講義だった。

これらの文において、分裂文にできることは、「受ける」がその前に現れる漢語サ変名詞とは分離しにくいひとつの単位ではなく、本動詞として働くことを意味している。前に現れる漢語サ変名詞はもちろん「～する」の形にすることができ、動詞的性質も持っているが、名詞的性質がより強い。文も迂言的受身表現ではなく、能動表現と見たほうがよいだろう。

興味深いのは(60)-(64)の分裂文における漢語サ変名詞の前に連体修飾節を入れると、許容度が上がることが観察できることである。連体修飾節を入れることはすなわち名詞である特徴をより強調し、名詞としての性質をより読み取りやすくすることであろう。

- (60') お父さんから受けたのは悪い影響だった。
- (61') 上司から受けるのは応じられない大きな期待だ。
- (62') 敵軍から受けたのは壊滅的な反撃だった。
- (63') 先生から受けたのは非常に有意義な示唆だった。
- (64') 母から受けたのは過剰な干渉だった。

そして、前節で問題となった「打撃」、「衝撃」などの漢語サ変名詞ではないが、「～を/に～後/中」のアスペクト接辞によるテストで動作性を持つと判断された一般名詞を見てみる。

- (68) a. 経済危機から打撃を受けた。  
b.?経済危機から受けたのは打撃だった。
- (69) a. あの光景から衝撃を受けた。  
b.?あの光景から受けたのは衝撃だった。

- (70) a. 病院の先生から診察を受けた。  
b. ?病院の先生から受けたのは診査だった。

それに対し、動作性を持たないと判断された一般名詞は分裂文にすることができる。

- (71) a. 特許局から特許を受ける。  
b. 特許局から受けるは特許である。  
(72) a. お客さんから好評を受けた。  
b. お客さんから受けたのは好評だった。  
(73) a. 米国株高から利益を受けた。  
b. 米国株高から受けたのは利益だった。

すなわち、前節で動作性を持たないと判断した一般名詞は分裂文にしても自然な文であり、その文における「受ける」は本動詞であり、文全体は能動文である。それに対し、前節で動作性を持つと判断した一般名詞は分裂文にすると不自然となり、その文における「受ける」は機能動詞として働き、文は迂言的受身表現である。

以上のように、分裂文のテストを用い、仮説を検証した結果、漢語サ変名詞においては「影響」のような名詞が「～を受ける」の前に現れた文の場合、分裂文が成立しにくく、「受ける」は機能動詞として働き、「-される」と同義性を保つ受身表現であることが分かった。この場合の漢語サ変名詞は動詞的性質がより強いと考えられる。それに対し、「講義」などの名詞が現れる際、「受ける」は本動詞として働き、文は「-される」になれるが、同義性を保っているとは考えにくく、能動表現であると考えられる。この場合の漢語サ変名詞は本動詞「受ける」の対象であり、名詞的性質がより強いと考えられる。また、「好評」や「利益」などの動作性を持たないと判断した語は「襁」や「助成金」と同様な一般名詞であり、分裂文も成立する。それに対し、「衝撃」など「～する」の形にならないが、動作性を持つと判断した語は分裂文になりにくく、その文における「受ける」は機能動詞であると考えられる。但し、「～する」の形にはならないため、「-される」とは置き換えができない。4.1の考察を表1にまとめる。

【表 1】漢語サ変名詞の語彙的性質

		本動詞/機能動詞	能動表現/受身表現	「-される」と対応
漢語サ	動詞的性質がより強い	機能動詞	受身表現	同義

変名詞	名詞的性質がより強い	本動詞	能動表現	同義でない
一般名	動作性を持つ	機能動詞	受身表現	対応しない
詞	動作性を持たない	本動詞	能動表現	対応しない

## 4.2 漢語サ変名詞の自他

「受ける」の前にはすべての動作性を持つ名詞が現れるわけではない。本節では「～を受ける」と最も結びつきやすい漢語サ変名詞を取り上げ、その構文的特徴に重点をおいて考察する。

現れた 207 語の漢語サ変名詞を語幹とする漢語サ変動詞を『明鏡国語辞典』で調べると、他動詞が圧倒的に多いが、自動詞もあることが分かる。BCCWJ より採集した用例<sup>11</sup>と村木のリスト<sup>12</sup>の中の自動詞を挙げる（「する」は省略）。

(74) 影響、干涉、衝突、作用、抵抗、投石、反撃、暴行、復讐、報復、反対、乱暴、協力、献血、合意、拍手、同情

(74)を見てみると、自動詞ではあるが、二格名詞句を取ることが分かる。杉本(1991)では二格をとる自動詞について考察し、「準他動詞」と呼ぶべき動詞が存在すると論じ、その特質について述べた。杉本(1991)によると、準他動詞は二格名詞句を取り、一般の自動詞と異なり、その二格名詞句が直接目的語のように振る舞い、直接受身文の主語になることができる。杉本(1991)では和語動詞と漢語サ変動詞を区別せずに述べているが、本稿では漢語サ変動詞のみを考察したい。

(75) a. 被告の態度が陪審員に影響している。 (杉本 1991)

b. 陪審員が被告の態度に影響される。

(76) a. 両親が花子の結婚に反対している。 (杉本 1991)

b. 花子の結婚が両親に反対されている。

(77) a. 親が私の生活に干涉している。

b. 私の生活は親に干涉されている。

(78) a. 車が横からバイクに衝突した。

b. バイクは横から車に衝突された。

<sup>11</sup> BCCWJ では「献血を受ける」が現れたが、1 例しかなく、不自然であるため、本稿では迂言的受身表現と認めず、除外する。

<sup>12</sup> 村木でまとめたリストの中で「迷惑」も迂言的な受身表現とされており、自動詞的な用法とされているが、「迷惑する」は「影響する」などの漢語サ変動詞と異なり、主語に立つ者はその行為を行う側ではなく、受ける側である。また、「-される」にもならないため、同一視するのは妥当でないと考え、本稿では除外する。BCCWJ から採集した「感染」も「迷惑」と同じように主語に立つ者は行為を行う側ではなく、「-される」にもならないため、除外する。

- (79) a. 住民が警官に投石した。
- b. 警官が住民から投石された。
- (80) a. 軍隊がテロに反撃した。
- b. テロが軍隊に反撃された。
- (81) a. 視界は直接人の精神に作用する。
- b. 人の精神は直接視界に作用される。

このように、自動詞ではあるが、二格名詞句を取り、さらに b のような受身文を形成することもできる。しかし、「拍手」と「協力」はほかの自動詞と異なり、受身文にすると、自然さが落ちることが観察できる。

- (82) a. 皆が長年病魔と闘っている花子に拍手した。
- b.?長年病魔と闘っている花子は皆に拍手された。
- (83) a. 親たちが教育活動に協力した。
- b.?教育活動が親たちに協力された。

(82)b と (83) b は自然さがやや落ちるが、それでも上の準他動詞と同様に、動作や行為の行う側と受ける側がともに存在し、能動文 a ではいずれも行為や動作の受け手や着点を表す二格名詞句を取る。さらに、受け手としての二格名詞句は何らかの働きかけを受けていることは共通している。

以上のように、「～を受ける」の前に現れる漢語サ変名詞を語幹とする漢語サ変動詞は他動詞のみでなく、自動詞も現れたが、いずれも目的語相当の二格名詞句をとる準他動詞であることが分かった。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では日本語の迂言的受身表現の中で最も生産性の高い「～を受ける」を取り上げ、主にそれと結びつく名詞に着目して考察を行った。「～を受ける」について、村木ではその前に動作性を持つ名詞が現れる際、動詞の受身形「-される」と同義性を保ち、置き換えてできる受身表現であると述べている。ところが、実際に「-される」に置き換えてみると、「-される」と同義性を持つとは考えにくく、受身表現より能動表現と見たほうが良い文もある。これは「～を受ける」の前に現れる名詞と深くかかわっていると考え、動作性名詞には動詞的性質がより強いものと名詞的性質がより強いものがあるという仮説を立てた。名詞性が強い場合、一般名詞が「～を受ける」の前に現れる際と同様に「受ける」は本動詞として働き、文は能動文であると考えられる。それに対し、動詞性が強い場合、「受ける」は機能動詞であり、文はいわゆる村木で言う迂言的受身表現であると考えられる。この仮説を分裂文成立可否のテストを用いて検証した。

また、「～を受ける」の前に現れる漢語サ変名詞を「～する」の形にした動詞は他動詞が多いが、自動詞もあることが分かった。しかし、自動詞と言っても普通の自動詞ではなく、目的語相当の二格名詞句をとる準他動詞であることも分かった。

本稿では、日本語の動作性名詞の名詞的性質と動詞的性質の度合いを「受ける」が本動詞として働いているか機能動詞として働いているかという点から間接的に測ったが、直接的に測る方法を考え、それを用いるべきであろう。また、「～を受ける」の前に現れるのはほとんど他動詞の漢語サ変動詞の語幹ではあるが、「殺害を受ける」や「心配を受ける」が言えないように、すべての他動詞が来られるわけではなく、何らかの制限があるはずである。さらに、中国語にも日本語の「受ける」と同じような動詞「受 shòu」が存在しており、「受 shòu+名詞」のような受身的表現もある。「受 shòu」と共起する名詞も動作性名詞が多いように観察でき、日本語の「受ける」と非常に類似している。しかし、今までの中国語の研究ではあまり重要視されておらず、受身表現と認める説もあれば、認めない説もある。今後、中国語と日本語を対照することによって、新たな知見が得られる可能性がある。今後の課題としたい。

#### 【参考文献】

- 伊藤たかね・杉岡洋子(2002)『語の仕組みと語形成』研究社。  
小林英樹(2004)『現代日本語の漢語動名詞の研究』ひつじ書房。  
杉本武(1991)「二格をとる自動詞―準他動詞と受動詞―」仁田義雄編『日本語のヴォイス と他動性』くろしお出版。  
竝木崇康(1994)「〈語〉の階層性」『言語』23-3。  
村木新次郎(1980)「日本語の機能動詞表現をめぐって」『国立国語研究所報告 65』秀英出版。  
———(1982)「外来語と機能動詞」『武蔵大学人文学会雑誌』13-4、武蔵大学。  
———(1983)「迂言的なうけみ表現」『国立国語研究所報告 74』秀英出版。  
———(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房。  
楊嵩郎(2010)『自他両用の漢語動詞に関する研究』筑波大学博士(言語学)学位論文。  
Shibatani, Masayoshi, and Taro Kageyama (1988) Word formation in a modular theory of grammar. *Language* 64.

#### 【辞書】

- 北原保雄(編)(2011)『明鏡国語辞典(第二版)』大修館書店